

浜田駅周辺グランドデザイン策定に向けた ヒアリングから見てきた基本的な方向性

1 はじめに

浜田駅周辺グランドデザインの策定にあたり、商店街、宿泊事業者、飲食事業者、水産事業者、農業関係者、文化団体、教育機関、子育て支援団体、創業支援機関、学生、行政など、幅広い分野の関係者へのヒアリングを実施した。

ヒアリングでは、駅周辺の現状や課題だけでなく、浜田らしい暮らしや将来のまちのあり方について意見を伺った。

当初は、駅周辺の活性化を主なテーマとしていたが、ヒアリングを重ねる中で、多くの関係者が目指していたのは、駅周辺だけを再生することではなく、浜田全体の地域資源を結び、人もまちも育ちながら、新しい暮らしの風景を創り出していくことであった。

食、文化、教育、スポーツ、産業など、それぞれの地域資源が互いにつながり、市民一人ひとりの暮らしを豊かにしながら次の世代へ受け継がれていく。その積み重ねが「帰ってきたいくなる浜田」につながるという考え方が、多くのヒアリングから共有された。

本報告書は、それらの意見を整理するとともに、今後の浜田駅周辺グランドデザイン策定に向けた基本的な方向性を取りまとめたものである。

2 ヒアリング実施者

ヒアリング期間：令和8年5月25日～7月28日

ヒアリング実施：54件

3 ヒアリングから見てきた現状と課題

(1) 駅周辺へ行く「用事」や「楽しみ」が少なくなっている

多くの関係者から、かつての駅周辺には商業、交流、文化など様々な目的があり、人が自然と集まる場所であったとの声が聞かれた。特に、朝日町で開催されていた土曜夜市など、駅周辺には市民が日常的に訪れる機会が存在していたことが語られた。一方で、現在は、「駅周辺へ行く用事がなくなった」「休日は市外へ出掛けることが増えた」「駅周辺へ行くことへのワクワク感が薄れている」といった意見が数多く聞かれた。

駅周辺の再生においては、市民や来訪者が訪れたい理由を増やし、「まちで何か面白いことが行われている」と感じられる日常を育てていくことが重要である。

(2) 駅周辺では浜田らしい暮らしとの接点が希薄になっている

駅は、学生や市民、来訪者など、多くの人々が日常的に行き交うまちの背骨ともいえる存在である。本来であれば、その駅周辺には地域の日常や暮らし、文化が自然と表れ、そのまちの魅力を感じられる空間が形成されていることが望ましい。

しかし、ヒアリングでは、駅周辺からそうした暮らしの風景が少しずつ失われて

きたとの意見が多く聞かれた。かつて商店街には本屋やレコード店など、知識や文化に触れることのできる店舗があり、人々が日常的に立ち寄り、交流する場となっていた。また、買い物や待ち合わせなどをきっかけに自然と人が集まり、まちの日常が形成されていた。

一方で、現在は、商店街の機能が変化し、昼間に立ち寄る理由や滞在する場所が少なくなっている。観光客が浜田を訪れても、市民の日常や浜田らしい暮らしを感じられる機会は限られており、本屋やカフェなど、気軽に立ち寄り、知識や文化、人に触れられる場を求める意見が多く示された。

また、浜田には石見神楽、浜田港の食文化、歴史、教育、ものづくりなど全国に誇る地域資源が存在するものの、それらが駅周辺の日常の中で十分に感じられる状況には至っていない。

駅周辺には、地域の暮らしや文化、人々の営みを感じられる空間を取り戻し、市民にとっても来訪者にとっても「浜田らしさ」を自然に体感できる環境づくりが求められている。

（３）浜田全体を一つの暮らしとして捉える視点が求められている

今回のヒアリングでは、駅周辺だけを再生するのではなく、市内各地域の魅力を結び付ける視点が数多く示された。

浜田港の魚介類、オーガニックビレッジ宣言に代表される有機農産物、石見神楽、教育施設、スポーツ施設など、それぞれの地域資源が駅周辺を結節点としてつながることで、新たな価値が生まれるとの意見が多く聞かれた。

都市部と中山間地域が互いの魅力を活かし、それぞれが支え合いながら浜田全体を一つの暮らしとして育てていくことが、これからのまちづくりに必要であるとの認識が共有された。

4 ヒアリングから見えてきた基本的な方向性

（１）駅前浜田観光の玄関口となる食と伝統文化のエントリーエリア

駅前は、浜田を訪れる人が最初に地域と出会う場所である。ヒアリングでは、浜田港で水揚げされる魚介類や有機農産物を活用した「食文化」、石見神楽をはじめとする「伝統文化」を駅周辺で日常的に体験できる環境を整えることで、浜田観光の玄関口としての役割を高めるべきとの意見が数多く示された。

駅前で浜田らしい「食文化」と「伝統文化」に触れることが、市内各地域への周遊につながる入口となるとともに、市民にとっても日常的に利用したくなる魅力ある空間の形成が期待されている。

（２）三桜酒造跡地は人と地域をつなぐ交流拠点

三桜酒造跡地は、多くの関係者から最も期待が寄せられた場所である。求められているのは単なるイベント広場ではなく、市民の日常の中にあり、自然と人が集まり、多世代が交流する拠点である。

特に、新しい知識や地域情報、文化に触れることができる場として、本屋やカフ

ェなど、気軽に滞在できる機能への期待が多く示された。

また、子どもから高齢者までが世代を超えて交流し、新たな体験や学びに出会える場としての役割も期待されている。

さらに、駅、図書館、朝日町商店街、市役所周辺などを結び、人や情報、活動が循環するハブとして機能することが望まれている。

（３）朝日町商店街は知識や体験を提供する小商いが集積する商店街

ヒアリングでは、朝日町商店街について、大規模な商業集積ではなく、小規模で個性ある事業者が集まり、それぞれの専門性や得意分野を活かした新しい商店街への期待が数多く示された。

物を販売する店舗だけでなく、知識や技術、体験を提供する小商いと親和性が高いとの意見が多く聞かれ、教室や工房、ワークショップ、ものづくり、デジタル技術、地域文化など、多様な学びや体験を提供する事業者が集積することで、日常的に人が訪れ、新しい発見や交流が生まれる商店街となることが期待されている。また、こうした事業者が互いに連携することで、新しい文化やコミュニティが育まれ、朝日町商店街ならではの魅力が形成されることが期待されている。

（４）三桜酒造跡地を起点にチャレンジが育ち、朝日町へつなげる仕組み

多くの事業者から、定期的なマルシェやマーケットを開催し、小規模な創業や新たな挑戦を実践できる場が必要との意見が示された。

特に、浜田港の魚介類や地域野菜、オーガニック農産物などを定期的に販売するマルシェを開催することで、市民が地域産品に触れる機会を増やし、浜田の食文化への理解を深めることが期待されている。また、マルシェは販売の場だけではなく、新しい事業や活動を試すチャレンジの場として位置付けられている。

三桜酒造跡地で経験を積んだ事業者が朝日町商店街へ出店し、常設店舗として事業を展開していくことで、小商いが段階的に育ち、商店街全体の魅力向上につながる循環が期待されている。

（５）文教エリアと駅の間で学びと創造を育てる拠点

教育関係者や子育て支援団体からは、子どもたちが学校だけでなく、地域の中で多様な学びや体験を積み重ねられる環境づくりが重要との意見が数多く寄せられた。文教エリアから駅へ向かう動線上には、学校帰り子どもや学生が気軽に立ち寄り、本や人との出会いを通じて、新しい知識や地域情報、文化に触れられる場が求められている。またお互いが交流できる場所も重要である。滞在しながら学びや交流が生まれる空間や、ものづくり、デジタル技術、創作活動などに触れられる環境を充実させることで、世代を超えて学びと創造が育まれることが期待されている。

（６）東公園周辺は健康と交流を育むウェルネスエリア

現在、東公園周辺は陸上競技場を中心に、大会や部活動、スポーツ合宿などを通じて多くの来訪者を受け入れ、スポーツ交流に寄与している。

一方で、ヒアリングでは、こうした機能に加え、市民の日常的な健康づくりを支える拠点としての役割を充実させるべきとの意見も多く示された。ウォーキングやランニング、健康づくり、憩い、カフェなどを組み合わせることで、競技スポーツだけでなく、子どもから高齢者まで誰もが日常的に利用できるウェルネスエリアへと発展させていくことが期待されている。

(7) 歩いて楽しいまちが浜田全体をつなぐ

ヒアリングでは、「歩いて楽しいまち」を求める意見が数多く聞かれた。駅、銀天街、三桜酒造跡地、朝日町商店街、図書館、東公園などを安全で快適に歩いて巡ることができる環境を整えることで、それぞれのエリアが一体となり、回遊性や滞在時間の向上につながることを期待されている。特に浜田川沿いを快適に歩けるようにしてほしいという意見が多く聞かれた。

また、「駅周辺へ行けば何か面白いことがある」という期待感が育まれることにより、常設のお店も増え、より回遊するまちへと生まれ変わることが期待される。

5 総括

ヒアリングを通じて、多くの関係者から共通して示されたのは、駅周辺の再生は単独の施設整備ではなく、浜田全体の地域資源を結び、人もまちも共に育ちながら、新しい暮らしの風景を創り出す取組として進める必要があるということであった。

浜田港の食、石見神楽をはじめとする伝統文化、郊外エリアの農業、教育、健康、創業支援など、多様な地域資源を駅周辺で有機的に結び、市民の日常利用と来訪者の滞在の双方を促すことが重要との認識が共有された。

また、定期的なマルシェやイベント、小さな創業への挑戦、歩いて楽しめる空間づくりを積み重ねることで、「駅周辺へ行けば何か面白いことがある」「新しい発見や出会いがある」という日常を育み、市民の日常と観光客の体験が交わるまちを形成していくことが期待されている。

ランドデザインにおいては、駅周辺だけを整備するのではなく、浜田港、朝日町商店街、文教エリア、東公園など、それぞれの地域が役割を分担しながら連携し、「オール浜田」の視点で、人・地域・産業・文化のつながりを育んでいくことが重要である。

食、文化、教育、産業、人、それぞれがつながり、新しい関係が育まれることによって、浜田らしい暮らしが次の世代へ受け継がれ、「帰ってきたくなるまち」へとつながっていくことが期待される。